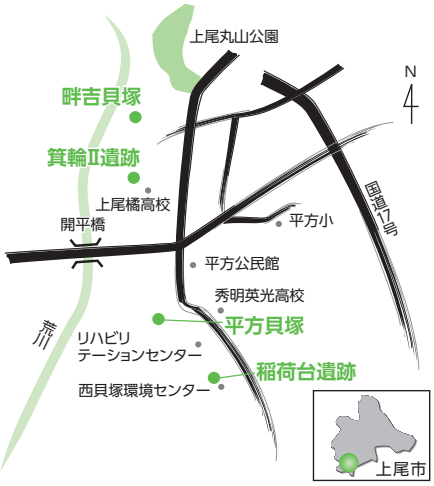
上尾歴史散歩 279

遺跡が語る上尾の歴史

上尾の海と平方貝塚

写真１　発掘調査当時の平方貝塚周辺（平成元年、左が荒川低地、右奥が平方貝塚のある台地斜面）



上尾市南西部に、西貝塚という地名の地区がある。西貝塚は、江戸時代には既に貝塚村と呼ばれており、土の中から貝殻が出てくることが古くから知られていた。それらの貝殻は、海水と淡水が混ざる地域（汽水域）に生息する貝のものであった。貝塚とは住居跡や台地の斜面に廃棄された貝殻が堆積した貝層のことで、これが内陸に存在することによって、近くに海があったと考えられるようになった。

内陸への海の侵入は、縄文時代に起こった（縄文海進）。地球の温暖化によって北極や南極の氷が解け、海水面が上昇したのである。海進が一番進んだのは、今から約６千年前の縄文時代前期である。気温は現在より平均で１～２度高く、海水面は５メートル以上も上にあった。海進によって形成された当時の海岸線は、奥東京湾と呼ばれている（**図１**）。西側の最奥部は上尾から桶川にかけての地域だったと想定されている。そこに位置する貝塚として、明治時代から注目されていた貝塚が平方貝塚である。

平方貝塚は、県立リハビリテーションセンターや秀明英光高校の西部から、荒川に向かって傾斜する台地の斜面に広がっている（**写真１**）。発掘調査によって、東西５メートル、南北２メートルの範囲に、60センチメートル程積み重なった貝層が確認され、さまざまな貝殻や土器片が出土した。層を成している貝殻は、汽水域に生息するヤマトシジミやマガキ、ハマグリなどで、この近辺に干潟や砂浜が形成されていたことが想像できる。

荒川沿岸には畔吉貝塚や稲荷台遺跡などの貝塚があり、平方貝塚と同様に貝殻や土器片が出土した。また箕輪Ⅱ遺跡からは、アオザメの歯が出土している。

このように貝塚は、上尾に海があったことを教えてくれたのである。また当時の人々が使っていた土器や食べていた貝、海に住んでいた生き物など、さまざまな情報を与えてくれる点でも重要な遺跡である。

出土資料の一部は、平方公民館の展示ケースで公開している。６千年前の海辺を思い浮かべながら見るのもいいだろう。

図１　約6,000年前の海岸線（---は現在）

コラム column

原市沼周辺の貝塚

上尾市内の貝塚は荒川沿岸だけでなく、原市沼周辺でも確認されている。この辺りは奥東京湾の入り江のような形状をしており、漁労が盛んに行われていたようだ。

貝塚が形成された時期は、縄文時代中期（今から約4,500年前）であり、荒川流域の貝塚よりは少し新しいが、貝層を形成する貝殻はヤマトシジミを中心にハイガイやハマグリなど同様のものがみられる。

こうしてみると、縄文人は海の幸ばかりを食べていたように思えるが、瓦葺の秩父山遺跡からは、イノシシやニホンジカの骨が確認されている。また、木の実をすり潰すのに使ったと考えられる石皿や、破損した土器の破片を漁網の錘として再利用した遺物も出土している。

縄文人は、貝や植物を採るだけでなく、海や陸で勇敢に動物に挑んで獲得し、豊かな食生活を送っていたことが、貝塚の発掘調査によって分かってきた。

秩父山遺跡の貝塚から出土したニホンジカの骨